

ハーバーマスの大学論をめぐって

小 野 隆 弘 四 反 田 想

Zu Habermas' Idee der Universität — Übersetzung und Erläuterung —

Takahiro ONO So SHITANDA

1. ハーバーマスの社会理論と『大学の理念』
2. J. ハーバーマス『大学の理念』
3. むすびに——教養の理想的・制度的革新にむけて

1. ハーバーマスの社会理論と『大学の理念』

J. ハーバーマス（1929-）は、了解に志向した行為である「コミュニケーション的行為」に基点をおいて総合的パースペクティヴをもった社会理論を構想しているが、『コミュニケーション的行為の理論』（1981年）において「体系的意図をもつ理論史」⁽¹⁾の形式でその全体像を提示している。大学論、学問＝科学（Wissenschaft）⁽²⁾論に関していえば、近代における科学的理性の道具的・技術的理性への一面化を「啓蒙の弁証法」というテーマのなかで批判するのはフランクフルト学派の伝統でもあるが、ハーバーマスにとっても、学問論、大学論は現代社会分析の主要な核をなすものになっている。『理論と実践』（1963年）の新版（1971年）につけた序論での自己の研究プログラムによれば、⁽³⁾認識と関心の連関という認識論の問題、批判理論の基礎をなすような社会理論の方法論の問題とならべて後期資本主義の社会システムにおける学問と政治と世論の関係という経験的問題をあげ、この現実の公共的論議の問題をさらにつぎの3つのテーマ、1）公共性の構造転換の問題、2）国家干渉主義と科学技術の計画的進歩に注目した現代資本主義論、3）科学政策と大学政策に区分している。この3）のなかには『抗議運動と大学政策』（1969年、現在は *Kleine Politische Schriften I-IV* に収録）などが示されているが、本稿2で全訳紹介する、ハイデルベルク大学

600 年祭の連続講義の一つである『大学の理念』⁽⁴⁾は『コミュニケーション的行為の理論』の体系化以降でハーバーマスが直接に大学を扱った論文としては恐らく始めてのものではないと思われる。

講演『大学の理念』の基本テーマは、「大学の理念」が空洞化し、改革への諦めが支配する現在においてフンボルトらの古典的理念にまでふりかえりながら、戦後西ドイツにおける 60 年代のヤスパース、シェルスキー、SDS（社会主義ドイツ学生同盟）の理念の革新の試みを再考するものであるが、そこで対置されるのが M. ウェーバーからシステム論的・機能主義的解釈にいたる大学論である。ここには、フランクフルト学派第一世代の道具主義的理性批判から機能主義的理性批判への転換という、ハーバーマスにおける時代の課題にたいする認識の推移がみてとれるが、主著『コミュニケーション的行為の理論』のライト・モティーフもこれであった。⁽⁶⁾本稿では、コミュニケーション的行為論の理論的枠組みを考察しながら『大学の理念』読解の手掛かりを探りたい。

大学の理念は 19 世紀を通じての産業社会の加速的な発展につれてその前提をつき崩されてきたのであるが、この「アカデミズム科学」の吊鐘と「産業科学」のはじまりという事態⁽⁶⁾を何よりもリアルにみたのは M. ウェーバーであったろう。「専門の仕事への専念とそれに随伴せざるをえないファウスト的な人間の全面性への断念とは、現今の世界ではすべて価値ある行為の前提であること、したがって『業績』と『断念』とは今日ではどうしても切り離しえないものになっている」⁽⁷⁾。

この「学問的無神論」（K. レーヴィット）の背景にあるのが、ウェーバーにおける「魔術からの解放（Entzauberung）」としての「合理化」という運命的で逆説にみちた時代認識であった。ハーバーマスは、ウェーバーの時代診断を次の二つのテーゼにまとめる。⁽⁸⁾「意味喪失」のテーゼは、近代の合理化過程によって宗教的・形而上学的世界像はその普遍的統合力を喪い、文化的価値領域が機能分化して、学問、法、道徳、芸術など各々が相互に緊張関係をもちながら固有法則的な展開を示すという「神々の闘争」＝価値多元的な現実の認識である。「自由喪失」のテーゼは、資本主義の発展を特徴づけている目的合理的行為のサブ・システムの自立化であり、資本主義・社会主義パラダイムに代わる官僚制化の認識である。

ハーバーマスは、このウェーバー歴史＝社会理論体系の批判的継承・超克の方向において、その『コミュニケーション的行為の理論』の章別構成・基礎概念を組み立てるが、その際「コミュニケーション的行為」の必須の補完概念として

フッサール以来の「生活世界」概念を導入する。フッサールは、この「生活世界」において、ウェーバーと同じく学問、アカデミズムの意味を根源的に問いかえすのだが、その方向において全く対極的な展開を示したのである。⁽⁹⁾ 学問の実証主義化による哲学の解体に「学問の危機」をみたフッサールは、一切の学的認識を先科学的な「生活世界」に立ち返りつつ、哲学において究極的に基礎づけようとした。では、この「生活世界」概念をとりいれたハーバーマスの『コミュニケーション的行為の理論』は、どのような方向においてウェーバーの宿命的ペシミズムをのり超えようとするのだろうか。

ハーバーマスは、ウェーバーだけでなくマルクス、ホルクハイマー = アドルノにも「共通している理論的弱点」⁽¹⁰⁾として次の二点を挙げ、それに対して自己の理論的枠組みを構成する。第一点は、行為論の概念構成において孤立した主体の目的論的行為に基礎をおいた狭隘性であり、これに対してハーバーマスは、「目的論的行為論からコミュニケーション的行為論へのパラダイム転換」をはかり、行為論を相互主観性のレベルで基礎づけようとする。第二点は、行為論的基礎概念とシステム論的基礎概念との混淆であり、システム論の一元化批判であり、これには社会を生活世界とシステムに二層的に区分することで対応する。

まず第一の、コミュニケーション的行為へのパラダイム転換は、脈落をなす地平、問題なしに相互主観的に共有された背景知というフッサール以来の現象学的「生活世界」概念の意味内容を受容するなかでおこなわれるのだが、「生活世界」概念が「コミュニケーション的行為」概念の必須の補完概念として、「行為論から社会理論へと接続する結節点」⁽¹¹⁾を明らかにする方向に展開されると、フッサール、シュッツらの意識哲学的限界ののりこえがはかれる。⁽¹²⁾ 「生活世界」概念を相互主観的なコミュニケーションのレヴェルでいかすために、ハーバーマスは、一方では、オースティン、サルルの言語遂行のレヴェルに焦点をあてた発話行為論を手掛かりに、⁽¹³⁾ コミュニケーション的行為という言語による相互了解行為にはその発話がおこなわれる社会的文脈である生活世界を無視できないことを示すとともに、発話に内在する、原理的に批判可能で、仮定的な妥当要求を相互に検証し承認しあう合意形成過程としてコミュニケーション的行為を捉える。こうして、コミュニケーション的行為は生活世界を相互主観的に解釈し、再生産する媒体として位置づけられる。しかも、他方において、ウェーバーの意味喪失のテーゼにみられる社会分化論、価値多元論を社会進化論によって、相互主観的なコミュニケーションによる学習過程としてよみかえることで、生活世界のコミュニケーション的行為による再生産は社会的な広がりを与えられる。ウェーバーのテーゼ

は、ハーバーマスにおいて一定受け入れられながらも、全く相反する意味あいをもって来る。分化によって解放された合理化の潜在力は、各々の抽象的価値基準の下で、すなわち真理—学問、善—法・道徳、美—芸術という各々の領域で真理性、正当性、誠実性という異なった妥当性が分離され、相互に要求され検証されることで具体化される。「このように分化した後は、学問、道徳論、法理論、芸術がそれぞれ内輪の歴史をもつようになる、——確かにそれは直線的な発展をたどるわけではないが学習過程ではある。」⁽¹⁴⁾生活世界の再生産は、生活世界の構造的分化を組込んだ生活世界の合理化として、コミュニケーション的行為が合理化の潜在力を相互主観的に学習するものとして解放する動態的な進化過程として、ポジティブに捉え返されることになる。

その際注意すべきことは、コミュニケーション的行為は、あらかじめ意味づけられた情報空間として伝統と化した生活世界を背景におこなわれる日常的コミュニケーション的行為と、問題が生じるたびに参加者自身その生活世界において再解釈し相互に了解を求めあう論議（Argumentation）という反省レベルとに、二層化して捉えられ、絶えずその往還関係⁽¹⁵⁾において、生活世界自体の原理的問い直しが保証されるものとして理解されていることである。

第二の問題が生じるのは、以上のように、本当はあくまで「システムの複合性の増大は生活世界の構造的分化に依存している」⁽¹⁶⁾のであるが、「了解志向行為は、規範的コンテクストに対して自律性の拡大を要求し、これと共に言語的了解的メカニズムは、次第に強力に要求され、ついには過大要求となり、非言語的なコミュニケーション・メディアによってかわられてしまう」という「生活世界とシステムとの分断（Entkoppelung）」が生じるからである。⁽¹⁷⁾こうしてハーバーマスは、「もはや行為論としては基礎づけえない」⁽¹⁸⁾システムの概念をパーソンズから受容することになるが、パーソンズのようにシステム論へと行為論が吸収されるシステム論の「過度の一般化」を回避しようとする。そのために、システムを貨幣や権力という非言語的な制御メディアによるものに限定すると共に、システムの自立も生活世界において根拠づけられ、正当化されることで係留される（verankert）ことを強調する。

こうして、近代の社会的合理化過程はシステムそのものの展開においてではなく、生活世界の合理化とシステムの複合性の増大という二つのゲゼルシャフト化（Vergesellschaftung）の原理の対抗関係として把握され、⁽¹⁹⁾さらに合理化のパラドックスとしてウェーバーが把えた現代社会の問題的構造は、システムが生活世界を従属させ包摂することによって、「生活世界の日常的意識がその統合力を奪

われ、断片化する」生活世界の文化的貧困化や物象化をもたらす生活世界の「植民地化 (Kolonialisierung)」として把握される。⁽²⁰⁾これを大学や学問に関連していえば、ウェーバーがすでに問題にしていた学問の科学としての制度化 = 「学問経営」⁽²¹⁾という事態は、戦後の「大学の構造転換」のなかで「大学のゲゼルシャフト化」や「職業実践の学問化」として一層高度に進展する。⁽²²⁾一方では、「大学は技術的に利用可能な知識を媒介するだけでなく、さらに生産もしなければならない」⁽²³⁾ようになり、「学問はますます第一級の生産力という役割を引き受けるようになる」⁽²⁴⁾。他方、社会の学問化としては、「現代の学問はほとんどすべての人間の生の前提になっている」が、「研究という根源的形式においてはますます少数の人によってのみ遂行されている」⁽²⁵⁾。こうして学問の専門職業化、いわばシステム化によって専門的知と日常的知との隔たりは広がって、知の合理化の進展がすぐには日常実践の資産とはならない生活世界の貧困化をまねいている、とハーバーマスはいうのだらう。このコミュニケーション的下部構造におこる「植民地化」の危機にたいして、言語による他者との相互行為という生きられた世界にたちかえることが要請されるが、生活世界が断片化しているなかでは生活世界の立場にたてばすむというものではないのでは、という疑念がおこらう。⁽²⁷⁾ハーバーマスにとっては、生活世界へのたちかえりは、そこにおいて生活世界の原理的問い直しが可能としてありうるということであり、現実のコミュニケーションを検証し相互克服する能力は、言語を介しての対話であるかぎり、発話に内在して、現実のコミュニケーションそれ自体のなかに内包されているのである。このことは、しかしながら、実際にいつも合意が達成可能ということでは全然無くて、「理想的発話状態の先取り」がつねにすでにおこなわれているという、反事實的 (kontrafaktisch) な想定の意味においてである。この一種の超越的条件⁽²⁸⁾が実際に機能するための方法的手だてとして、日常的コミュニケーション的行為と論議とのあの往還関係は構想されているといえよう。ウェーバー以上にハーバーマスが「近代」に固執すること、そのことがいかに異様にみえようとも、その固執の仕方こそが問題にされねばならないだらう。近代こそが原理的批判可能性と基礎づけの必要性を普遍的に要求できるのであり、したがって、自らのうちから規範を作り出さねばならない近代において、他者との相互行為に焦点をあてたコミュニケーション的行為論は、「未完のプロジェクトとしての近代」を具現化していくための方法装置であり、実践に開かれた「批判的社会理論の規範的土台」⁽²⁹⁾をなすのである。

註

- (1) Habermas, J., *Theorie des kommunikativen Handelns*, 1981, Bd. I. s. 201, 河上倫逸・M. フーブリヒト・平井俊彦訳『コミュニケーションの行為の理論(上)』1985年、未来社、202頁。以下、*TkH*, 原著頁、邦訳頁と略す。なお、中巻は藤澤賢一郎・岩倉正博・徳永 恂・平野嘉彦・山口節郎訳、1986年、下巻は丸山高司・丸山徳次・厚東洋輔・森田数実・馬場孚瑳江・脇 圭平訳 1987年。
- (2) 周知のようにドイツ語では学問も科学も *Wissenschaft* で表記される。現代になれば学問の科学としての制度化がすすむので科学の方が適当と思える場合は多いが、本稿ではできるかぎり学問という訳語をあてた。
- (3) Ders., *Theorie und Praxis, Sozialphilosophische Studien*, 1963, 1971², S. 10 ff. 細谷貞雄訳『理論と実践——社会哲学論集』1975年、未来社、565頁以下。
- (4) Ders., *Die Idee der Universität——Lernprozesse*, in: *Eine Art Schadenabwicklung, Kleine Politische Schriften VI* (『一種の損害処理——政治小論集VI』), 1987, S. 71-99, なお、この本の第二論文“*Heinrich Heine und die Rolle des Intellektuellen in Deutschland*”は、轡田 収訳「ハイネとドイツにおける知識人の役割」、『思想』1987年、12月号としてすでに紹介されている。また、ハイデルベルク大学600年祭記念の連続講義は最近出版された(*Die Idee der Universität——Versuch einer Standortbestimmung*, 1988, Springer-Vg.)が、その内容は次のとおりである。
 Gadamer, H-G., *Die Idee der Universität——gestern, heute, morgen.*
 Meyer-Abick, K. M., *Die Idee der Universität im öffentlichen Interesse.*
 Lepenies, W., *Die Idee der deutschen Universität——ein Blick von außen.*
 Eigen, M., *Die deutsche Universität——Vielfalt der Formen, Einfalt der Reformen.*
 Lübke, H., *Die Universität im Geltungswandel der Wissenschaft.*
 ならびにハーバーマスの講義である。
- (5) 『コミュニケーションの行為の理論』は二部に分かれているが、第二部のテーマが「機能主義的理性批判」である。
- (6) これらはJ. ラベッツの概念だが、姜尚中『マックス・ウェーバーと現代』1986年、御茶の水書房、198頁による。ウェーバーとフッサールとの対置のなかでハーバーマスを位置づけるという視点とその要点は、『前掲書』第四章を参照されたい。
- (7) Weber, M., *Die protestantische Ethik und der Geist des Kapitalismus*, in: *Gesammelte Aufsätze zur Religionssoziologie I*, S. 203, 梶尾 力・大塚久雄訳『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』下巻、1955年、岩波文庫、244頁。
- (8) *TkH*, I 332 ff. 上 334 頁以下。
- (9) 姜『前掲書』158-159 頁など参照。
- (10) *TkH*, I 209, 上 212 頁。
- (11) *TkH*, I 452, 中 84 頁。

- (12) ウェーバーの二つのテーゼの批判的克服のためにあてられた *TkH* の第三章、第六章を中心にみられたい。なお、藤原保信・三島憲一・木前利秋編著『ハーバーマスと現代』1987年、新評論も参照。
- (13) ハーバーマスが言語論において、言葉と現実との関係をあつかう意味論でも、言葉と言葉の関係をあつかう統辞論でもなく、人と人との関係で言葉が使用される過程を問題にする語用論を採用したことが、真理論においては対応説でも整合説でもなく合意説を、規範論においては討議倫理説をとったことと関連している。野家啓一「海峡を隔てた『語用論』」、『現代思想』1986年、vol. 14-11 所収、森 元孝「批判としての社会的行為論」、『社会学評論』1984年、139号所収、木前利秋「理性の行方―問題設定と視座」、藤原他編『前掲書』所収を参照。
- (14) *TkH*, II 481-2, 下 318 頁。
- (15) 岩崎 稔「近代の批判的自己確証と道徳・人倫の問題」、藤原他編『前掲書』所収、247 頁以下。
- (16) *TkH*, II 288, 下 92 頁。
- (17) *TkH*, II 232, 下 69 頁。
- (18) Honneth, A. u. H. Jonas, *Kommunikatives Handeln*, 1987, S. 378.
- (19) *TkH*, I 458-9, II 470, 中 98-9 頁、下 308 頁。なお、Vergesellschaftung は「社会化」と訳されることも多いが、それでは Sozialisation と混同されることにもなるので、ウェーバーらの古典的規定にならっている。木前「前掲論文」40 頁、参照。
- (20) *TkH*, II 292-3, 452-3, 521-2, 下 124-5 頁、289-90 頁、357-8 頁。
- (21) 「学問経営 Wissenschaftsbetrieb」はウェーバーの『職業としての学問』からの用語であるが、2 での訳では「経営」という日本語の日常的意味を避けるために「学問的営為」とした。姜『前掲書』を参照。ウェーバーの「経営」概念は、営利の観点からではなく技術的観点から使用され、継続的な目的的な行為をさす。とりあえず、小野「M・ウェーバー『経済社会学』における『形式合理性』について」、『長崎大学教養部紀要、人文科学篇』1985 年第 25 巻第 2 号、65 頁をみられたい。
- (22) 2 の IV ならびに訳註 (12) を参照。
- (23) Habermas, J., *Kleine Politische Schriften I-IV*, 1981, S. 141.
- (24) Ders., *Theorie u. Praxis*, S. 13, 邦訳 568-9 頁。
- (25) Ders., *Kleine Politische Schriften*, S. 110.
- (26) *TkH*, II 482, 下 318 頁。
- (27) 中野敏男「合理性への問いと意味への問い」、藤原他編『前掲書』228 頁。
- (28) 野家啓一「前掲論文」164-5 頁。
- (29) *TkH*, II 583, 下 419 頁。

2. J. ハーバーマス『大学の理念』

大学の理念—学習過程

ユルゲン・ハーバーマス

(小野隆弘・四反田想 訳)

ハイデルベルク大学 600 年祭に際して市立劇場は 1986 年の夏に一連の講義を主催した。このなかで——そして私が自らの教授活動をかってガダマーとレーヴィットのもとで始めたその地で——以下の講義を行なった。

I

当時カール・ヤスパースとアルフレート・ウェーバー、ドルフ・シュテルンベルガーとアレクサンダー・ミッチャリッヒによって創立された雑誌『変化』(„Die Wandlung“)の第 1 巻第 1 号に、内的亡命から自分の講座に戻っていた哲学者が 1945 年にハイデルベルク大学の再開に際して行なった講演を読み返すことができる。それはカール・ヤスパースの『大学の革新』(„Die Erneuerung der Universität“)である。その当時ヤスパースは、現代史の状況が新たなる始まりへの展望を与えたことを強調して、最初に 1923 年に発行され、1946 年に再版された『大学の理念』についての彼の著作から、その中心的思想を取りあげた。15 年後の 1961 年に、その本は改訂された。その間にヤスパースは、自らの期待が外れたことに失望した。苛立ち、まさに呪咀せんばかりに、その当時、改訂本の序文に次のように書いている。「ドイツの大学を維持することは、新しい組織形態の実現を決断するという形での理念の再生によって成功するか、或いはまたドイツの大学は科学的・技術的専門家のための巨大な学校及び教育施設に見られる機能主義の中にその終焉を見いだすかである。従って、理念の要求から、大学の革新の可能性を……立案することが肝要なのだ。」¹

依然としてヤスパースは、無邪気にも、ドイツ観念論に内包される社会学に基礎を置く諸前提から出発している。それによれば、制度上の秩序とは客観精神の諸形態である。制度が機能し続けるのは、制度がそれに内在する理念を生き生きと体现する限りでのみである。精神が制度から消え去るや否や、魂なき有機体が死んだ物質へと解消するのと同じように、制度は何か単に機械的なものへと硬直化する。

大学もまた、その協同の意識を統合する紐帯が破壊するや否や、もはや全体を

形成しない。大学が社会のために果たす諸機能は、分業によって協働しているその構成員たちの目的設定、動機、行為と、いわば内部から（絡み合った様々な意図を媒介して）統合し続けなければならない。この意味において、大学は、その所属員たちによって相互主観的に共有された生活形式、しかも範例的な生活形式として体現し、同時に動機として固定されるべきである。

フンボルト以来、『大学の理念』と言われているものは、一つの理想的な生活形式を具現化しようとする構想である。この理念は、それが、職能身分的に階層化した初期ブルジョワ社会の多くの特定の生活形式のうちの一つを示すだけでなく、——学問と真理とのその緊密な結び付きのおかげで——、社会的な生活形式の多元主義に先行する或る普遍的なものをもまた指摘するということによって、その他の設立理念に比べてなお際立っていなければならない。大学の理念は、それに従って客観精神のすべての形態が形成される教養法則（Bildungsgesetze）を指摘しているのである。

たとえも範例的なものへのこの過度に感情的な要求を考慮しないとしても、現代の大学制度のような見通せない組織が、その構成員たちの共通の考え方によって貫かれ、支えられなければならないという諸前提からして、もう既に非現実的ではないのか。「ただ、大学の理念を自らの内に抱いている者だけが、大学のために事実即ち思考し、行動することができる。」² ヤスパースは、そこにおいて、高度に分化した社会における機能的に専門化した部分システムが沈黙している、組織の形をとった現実が、全く異なった前提に基づいているということ、既にマックス・ウェーバーから学び取ってしまうことは出来なかったのか。そのような経営やアンシュタルトが機能できるのは、構成員の動機が組織目的並びに組織機能から分断されている、ということにまさに依存している。組織は、もはやいかなる理念をも体現しない。組織に理念という義務を負わせようとする者は、組織の実際的な活動の場を、構成員によって共有された生活世界の比較的狭隘な地平に限定しなければならないだろう。フランクフルター・アルゲマイネ・ツァイトゥングは、ハイデルベルク大学をその600回目の誕生日に際して多くの記事で敬意を表して甘やかしているが、一つの記事は、案の定、覚醒的な結論に到達する。「フンボルトへの信仰告白は、我々の大学の生存のための方便である。彼らは何ら理念をもっていない。」³ この観点からすると、ヤスパースのように大学の理念を持ち上げ、ますます弱々しい声ではあるが、今なお引き合いに出す全てのあの大学改革者たちは、近代化に敵対する文化批判の単なる防衛的な精神の持ち主に属している。さて、ヤスパースは、社会学とは疎遠で、教養エリート的、

市民的な文化ペシミズムの観念論的特徴、即ちドイツ・マンダリン⁽¹⁾の背景イデオロギーから、確かに自由ではなかった。しかし彼は、1960年代にプロイセンの大学改革者たちの理念に遡って取り上げ、時機を失した大学改革を提訴したただ一人ではなかったし、また最も影響力の強い者でさえもなかった。ヤスパースの著書の改訂版の二年後である1963年に、ヘルムート・シェルスキーは、その、既にタイトルからして粉れもない著書『孤独と自由』によって、発言を求めた。そして更に二年後、(まず初めに1961年に紹介された)SDS(社会主義ドイツ学生同盟)の覚書が完成して、『民主主義における大学』という題目で発行された。これは、三つの世代と三つの異なった視点からの改革文書である。それらは、その時々ますます大きくなった、フンボルトからの距離と——そして大学の理念についての社会科学的な醒めた取り扱いを鮮やかに示している。世代の差や、メンタリティーが変化したにもかかわらず、明らかに三つの党派のうちのどれ一つとしても、まさにあの理念の批判的な革新が問題になっている、という考えを捨てることは出来なかった。シェルスキーは次のように述べた。「大学の改革とは、今日では、その規範的理想像の新たな創造と改造であり、即ちフンボルトと彼の同時代人たちが大学のために成し遂げた課題を、時代に即して反復することである。」⁴そして、当時SDSの覚書を推薦したその序文を、私は次の文章で結んでいる。「この本は、一つの偉大な伝統を頑なまでに継承しようと思っている人達にとっては挑発的であるかもしれない。しかしこの批判がそのように仮借なかったのは、それが自らの基準を、大学のより優れた精神それ自体から借用する、という理由だけに因るのである。著者たちは」——当時はベルリンの学生達であり、今日ではクラウス・オッフエやウルリッヒ・プロイスのように、れっきとした有名な教授たちであるが——「ドイツの大学がかって要求したものと一体化する。」⁵

二十年という歳月に加えて、大学の組織改革が、乗り気のしないままに遂行され、部分的に再び撤回されたことによって、我々は今日、その革新された理念の光を当てて、大学に一つの新しい形態を与えようとするこれらの試みから遠く離れてしまった。この間に設立されたグループ制大学⁽²⁾に関する論争の濛々とした熱気が消え去った後で、諦めきった視線が分極化した大学の風景の上をかすめるのである。何を我々はこの二十年間から学ぶことが出来るのか。ヤスパースが気づいているように、既に第一次世界大戦の後で次のように宣言したあのリアリストたちの言うことが、いかにも正しいかのように見える。「大学の理念は死んでしまった。幻想を放棄しよう。虚構を追いつめるな。」⁶或いは、我々は、そのような理念が、大学という組織された学習過程の自己了解のために相変わらず演

じることが出来るかも知れない役割を、正しく理解出来なかつただけだったのか。大学は、或る加速的に分化した学問体系の内部での機能的な専門化への途上で、かつてその理念と呼ばれたものを、空虚な殻として脱ぎ捨てなければならなかつたのか。或いは、学問として組織された学習過程という大学の形式は、今日でもなお、必ずしも一つの規範的な理想像を要求しないが、それにもかかわらず大学に所属する者たちの自己解釈における或る種の共通性——即ち、団体意識の残滓——を必要とする、様々な機能を一つに束ねるという行為（eine Bündelung von Funktionen）に依拠しているのだろうか。

II

この問題にこたえるためには、おそらく大学の現象的な発展をみておくことで十分であろう。第二次大戦以降における教育の拡大は世界的現象であり、パーソンズは「教育革命」と呼んでいる。ドイツ帝国において学生数は、1933年から39年の間に12万1千人から5万6千人へと半減した。1945年には後の西ドイツの地域においてまだ15の大学しかなかったのである。50年代の半ばに、50の学術的大学⁽³⁾がすでに再び約15万の学生を育成した。それから60年代の始めに第三の領域⁽⁴⁾を構築することをめざして路線がひかれた。それ以来、学生数はふたたび4倍になった。現在は100万人以上の学生が94の学術的大学において学んでいる。もちろん、国際的比較をするときにはじめてこの絶対数が情報としての意味をもちうるであろう。

ほとんどすべての西欧産業社会において、1945年以降組織の面での教育の拡大傾向がはじまり、70年代の末にいたるまで引き続いて増大した。発展した社会主義社会においては、同様の発展傾向は50年代に集中してみられる。すべての産業国家において、UNESCOが1950年から1980年にいたる期間で概略計測した中等教育への進学率は30%から80%に増え、それに応じて大学進学率もわずか4%から30%へと上昇している。さまざまな産業社会において教育の拡大が並行しておこったことがよりはっきりと示されるのは、マックス・プランク研究所の教育研究の第二次教育報告に発表された西ドイツにおける教育システムのもつ選択性（Selektivität）をアメリカ、イギリス、フランス、東ドイツのそれと比較する場合である。各国の教育システムは全く異なっているにもかかわらず、そしてまた、政治・社会システムにおいても違いがあるにもかかわらず、最高の学歴にたいしては同一の数字が示されている。教育エリートを高等教育の程

度で（通常は、ドクター取得で）はかるとすると、その割合は年間1, 5%と2, 6%の間になる。また、教育エリートを大学における長期勉強（Studium）の最も重要な形式を修了したかどうかでみると（ディプロム、マギスター、国家試験）、その割合は年間8%から10%の間になる。第二次教育報告の著者は、この比較を質的分化の領域までおしすすめて、たとえば次のことを確認している。すなわち、出版活動とか外的指標によって評価される学問の生産性は、個々の専門において世界的におどろくほど類似している。——各国の大学制度が開かれた構造をもっているか、選抜とエリート教育とが強調されているか、にはかわりなくである。⁸

ドイツの大学には、国家によって組織された改革にたいする執拗な抵抗があるが、にもかかわらずそれは単に量のレベルにおいてのみ変化しただけではない。特殊ドイツ的遺産の際立った特徴はぬぐいおとされた。正教授大学（Ordinarienuniversität）において、時代おくれになったヒエラルキーは解体された。いくらか地位の平準化が生じるとともに、マンダリン・イデオロギーもその基礎を失った。教育と研究が疎開する形で自立し、内的分化することで、双方はますます対立的なものになった。一言でいって、内的構造という点においても、西ドイツにおけるマス化した大学は他の産業諸国の大学に似てきているのである。

したがって、国際比較をする教育社会学のアプローチから離れると、機能主義的解釈をどうしても導くような考えが示される。その解釈によれば、社会的近代化の法則性が大学の発展をも規定することになる。もちろん西ドイツにおいては、大学の発展は東ドイツやその他西欧諸国と比べて10年間の遅れが生じている。それから、教育の進展はその最大に加速化した局面においてそれに応じたイデオロギーを生みだした。維持しがたくなった現状にたいする、改革派と擁護派の論争は、大学の理念を革新すべきか、あるいは保持すべきかが問題であるという誤った前提のもとで、当時あらゆる側面から決着をつけられてきたようにみえる。このイデオロギーにみちた形態において、両派のどちらも意図しなかったプロセスが生じたが、それは又、革命的學生たちが当時「テクノクラティックな大学改革」として闘ったプロセスであった。この改革の象徴としては、いたるところで機能的に自立した学問システムが細分化する方向において、単に新しい一歩がわれわれに生じただけのように思える。学問システムがシステムの機構を介して制御されるようになり、経済と計画行政という環境にたいする技術的に利用可能な情報と職業上の資格証明とをディシプリンとして構成するようになればそれだけ、学問システムは、教授と學生の頭のなかでは規範的統合をますます不必要

にしてしまう。このような考えに対応しているのは学術審議会⁽⁶⁾のプラグマティックな勧告であり、システム制御、ディシプリンの自立、研究と教育の分化を進展させるために重点の移動を要求している。⁹

もちろん学術審議会が理念政策のうえで抑制していることは、これ以上の解釈をペンディングにしている。その慎重な勧告は、今日広く受け入れられている新保守主義の解釈パターンと一致する、あの機能主義的見解を必然的に意味するというわけではない。一方においては、機能的に細分化した学問システムは信頼されており、それにたいしては、協同の自己理解に基づいた理念の中心がもっている規範的統合力も単に阻害的なものにすぎないであろう。他方においては、システムとして凝固した大学の自律性を媒介にして、かつては全く異なって、すなわち規範として意味された自律性という伝統の衣装を広げるために、記念祭の日々はレトリカルな契機として好んで利用されることだろう。そのときにはこのようなヴェールのもとで、機能的に自律化した部分システムの間での、また大学と経済的・軍事的・行政的複合体との間での情報の流れは、それだけますます目立たない形で根をおろしていくことができるであろう。この観点からは、伝統意識はなお代償価値においてのみ測られるにすぎない。すなわち、伝統意識がどれだけ価値があるかどうかは、伝統の理念を奪われた大学において伝統意識が取り繕うことができる穴がどれだけ大きいかによるのである。この新保守主義的解釈も、もちろん社会学的にみれば、循環する教育の景気変動の単なる反映であろう。——その景気変動がそのときどきに浮揚するのを助ける政治やテーマや理論によっても全く惑わされないで。

延期された近代化という特徴をもって西ドイツにおいて60年代初めにはじまった積極的な教育政策は、大連立の終わりまではすべての政党のねばりある合意にもとづいていた。それから第一次ブランド政権の間に、西ドイツは教育政策のうえでの好景気を経験した——そして分極化のはじまりを。最後に1974年以降、教育政策は二つの側面から経済恐慌に遭遇したために下降期がはじまった。すなわち、労働市場の条件が劣悪化したために卒業生の側に、他方では財政危機によってコストと金融の面におこったものである。¹⁰したがって、新保守主義者によって教育政策の現実主義的な新展開と今日考えられていることは、強くは経済的ならびに政治的に説明されるべき教育計画の景気後退現象としても理解することができる。¹¹しかし、もし教育の景気変動がそのテーマと理論において徹底して考察されるならば、今日支配的な機能主義的な解釈も素直に額面価値どうりには受けとることはできない。この20年間に加速化した細分化の過程は、システム論

から説明されるには及ばないで、大学が生活世界の地平からいまや全く脱却したという結論に至らざるをえない。

さまざまな機能をひとつの制度という屋根のもとに伝統的に束ねること、そしてまた、次のような意識、すなわち、ここでは学問的認識を獲得する過程は、技術発展やアカデミックな職業への準備と関わるだけでなく、一般教養や文化の継承や政治的公共性⁽⁶⁾における啓蒙とも関連しているという意識は、研究それ自体にとってもまさに死活にかかわることであろう。学問の学習過程がもっぱら研究の機能に専門化される場合、その学習過程の動因は結局麻痺してしまわないであろうかという問題は、経験的にみてまだ解釈されていないように思える。学問の生産性は大学の組織形態に依存しているであろう。すなわち、学問の後継者を養成すること、アカデミックな職業への準備をすること、ならびに、一般教養、文化の自己理解、世論の形成という過程へと参加すること、これらのそれ自体分化した複合性に依存しているであろう。

大学は、このさまざまな機能を束ねるという注目すべきことを通して、なお生活世界に根をおいているのである。社会化、(文化的)継承ならびに社会統合的意思形成という、⁽⁷⁾これらを介して生活世界が再生産される一般的現象は、もちろん、大学の内部においては、認識価値に方向づけられた学問の学習過程という高度に人工的な条件のもとでのみ維持されるにすぎない。これらの関連が完全に解体しないかぎり、大学の理念はともかくも全く死んでしまうことはありえない。これらの関連の複合性と内的分化はもちろん軽視されてはならない。古典的なドイツの大学の生誕期において、プロイセンの改革者たちは、学問の学習過程と現代社会の生活形式との過度に単純化した関連をそこから暗示させるようなモデルを構想した。彼らは、大学にたいして、観念論の宥和哲学の観点から大学が始めから過大要求せざるをえなかったような全体化の力を期待した。とくにこの衝撃によって、大学の理念はドイツにおいてその魅力を保ってきたのである——今世紀の60年代までは。この間に大学の理念がその力をいかに失ってきたかは、われわれの連続講義の場所からしてすでにおわかりであろう。市立劇場がありがたいことにイニシャティヴをとったことは、大学の理念にたいして壁の外において (*extra muros*) しか新しい生命が吹き込まれることができないであろう、という考えを呼び起こさせるのである。

大学と生活世界との関連の複合性を明らかにするために、大学理念の核心を過度な単純化という外観から解き放ちたい。まず、シェリング、フンボルト、シュライエルマッハーという古典的理念を思い起こし、つぎに、ヤスパース、シュル

スキー、SDS 改革者たちという理念の革新をもとめる三つのタイプを取り扱うことにする。

III

フンボルトとシュライエルマッハーは、大学の理念を二つの考えと結びつける。第一に彼らにおいて問題となっているのは、宗教と教会の後見から開放された近代の学問が、その自律性を他の側から危険に晒すことなく——それが学問の外的存在を可能にする国家当局の命令によってであれ、若しくは学問的な仕事の有益な結果に関心を持っているブルジョワ社会の影響によってであれ——どのように制度化されうるか、ということである。フンボルトとシュライエルマッハーはその問題の解決を、政治的介入から、同じくまた社会的命令から、高等学術機関を守る、国家によって組織された学問の自律性のなかに見ている。次に、フンボルトとシュライエルマッハーはしかしまた、内部に向かって無制限な自由の外的な形態を大学に対して保証することが、何故国家それ自体の利益になるのかを説明しようとする。そのような文化国家⁽⁸⁾は、研究として制度化された学問が持つ、統一を作り出し全体化する力が、恵まれた結果を必然的にもたらすことによって、推奨される。ただ学問の仕事だけが研究過程の内的ダイナミズムに委ねられるならば、そしてまた「学問を未だ全く見つけだされていないもの、そして決して見いだされ得ないものとしてみなすという」⁽⁹⁾原理⁽⁹⁾がそのようにして保たれるならば、その時には、道徳的文化、とりわけ国民の精神生活は、その点を二人とも確信しているが、一つの焦点を成すように高等学術機関の中へ収斂されるはずなのである。¹⁸

この二つの考えは、融合して大学の理念になり、ドイツにおける大学の伝統の、比較的顕著な特性のうちの幾つかを説明する。それがまず第一に了解させるのは、自らを非政治的なものとして理解している大学の学問が持つ、国家に対する肯定的関係であり、第二に、職業上の実践、とりわけ、教育と研究の一致という原則を危険に晒すかもしれない職業教育の要求に対する、大学の防御的關係であり、そして第三に、大学内部での哲学部の中心的地位、並びに全体としての文化と社会に対して学問に与えられる強調的な意味である。「学問 (Wissenschaft)」という語は、英語やフランス語においては単純な同義語は見い出せないほど、確かにドイツ語において非常に豊かなコンテクションを付与した。従って、大学の理念から、一方では、学問システムの機能的固有法則性を指摘するが故に発展の将来性を孕むことにおいて、学問の自律性が重視されるが、それは確かに『孤独と

自由』⁽¹⁰⁾の中においてのみ、即ちブルジョワ社会と政治的公共性に対して距離を置いて、知覚されるべきである。他方では、そこにおいて生活世界の全体性が反省的に統合されなければならない、文化を形造る、学問の普遍的な力が生じる。ブルジョワ社会に対する防御的關係と、生活世界全般に対する内的關係のために、哲学的基础科学として二人が思い浮べていた学問は、言うまでもなく非常に特殊な条件を満たさなければならないのである。

ドイツ観念論哲学が自ずから研究と教育の一致を必要としたので、改革者たちは当時、学問のプロセスを、研究しつつ教育するという、ナルシシズム的に自己閉鎖的な循環過程として心に描くことができた。今日では研究のそのつど最新の状況に基づく議論と、勉学(Studium)という目的のためのこの知識水準の叙述は、二つの異なるものであるのに対し、シェリングは、彼の『大学における学問研究方法についての講義』(„Vorlesungen zur Methode des akademischen Studiums“)のなかで、哲学的思考の構造それ自体の中から、その教育的媒介の形式が生まれる、ということを示したのだった。出来合いの成果を、「単に歴史的に」講演することに対して、彼は「内的な、生き生きとした直観から学問の全体が」¹⁴構成的に展開することを対置する。一言で言うと、この種の理論は、その叙述のカリキュラムと重なり合う、構成上の構造を必要としたのである。

同じようにして大学は、生活世界へのその内的関連を、学問の持つ全体化する力に依拠できなければならなかった。改革者たちは、三つのアスペクトのもとで、哲学に統一を作り出す力があると信じた。即ち、我々が今日語るであろうように、文化的伝承、社会化、そして社会的統合に関してである。哲学的基础科学は第一に百科全書的に構想されており、かかるものとして学問的ディシプリンの多様性における統一を保証し、また一方では芸術と批評との、他方では法と道德との学問の統一をも保証することができた。哲学は文化全般の反省形式として適切であった。第二に、そのプラトン主義的特徴は、研究過程と教育過程との一致を保証しなければならなかった。即ち、理念が把握されることによって、理念は認識者の人倫的な性格の中へ内面化されると同時に、認識者をあらゆる一面性から解放する。絶対的なものへの高揚は、個性の全面的な展開への道を拓く。この種の学問との関わり合いによって理性的になるので、「学問を植付ける学校(die Pflanzschulen)は、同時に一般的な教育機関」であり得る。¹⁵最後に、あらゆる理論形成の反省哲学的基礎は学問と啓蒙の一致を約束したのである。今日では哲学は、専門家の秘教的関心を自らに引きつける一つの専門学科になってしまったのに対し、認識する主体の自己関係から出発して反省的思考運動の途上であらゆる認識

内容を展開した哲学は、学問への専門家の秘教的関心を、自己了解と啓蒙への素人の公教的な関心と共に同時に満足させることができた。¹⁶ 哲学はその時代を思考において把握することによって、哲学は宗教が持つ社会統合的な力を、理性の宥和的な力によって置き換えるべきだ、とヘーゲルなら言うであろう。それ故にフィヒテは、そのような学問を単に制度化するだけの大学を、将来の解放された社会の生誕の地として、それどころか国民教育の場として理解することができた。反省することを身につけている学問は、我々に疎遠で在り続けるものではなく、我々の生の最も内奥の根源をまさに解明するのである。「明晰さを、今やどの学術団体も、全く自分自身の関心のために、自分の周りに取り巻かせることを望み、それを全力で押し進めなければならない。従って各学術団体は、それが自己自身の中にだけ幾らか首尾一貫性を獲得したように、自己自身の根底としての国民教育組織へと、また明晰さと精神の自由へと留まることなく流れて行き、そしてそのように総ての人間の諸関係の革新を準備し、可能にしなければならない。」¹⁷

その名高い設立文書において我々に対置される、あの大学の理念の危険で本当とは思えない側面が、初めて全面的に明らかになるのは、次のような学問の制度化のために満たされていなければならない条件をはっきりと理解する時である。即ち、その或る学問とは、その内的構造によってのみ、研究と教育との一致、諸学問の統一、学問と一般教養との一致、並びに学問と啓蒙との一致を、同時に可能にし保証しなければならなかったものなのである。

厳密に理解された研究と教育の一致とは、ただ、学問的進歩のイノベーション過程にとって必要であるのと同じだけ教えられ学ばれる、ということを意味している。また教授たちが自分自身の後継者たちを養成するという意味においても、学問は自己を再生産しなければならない。将来の研究者こそが、研究する学者たちの大学がそのために専門教育の任務を引き受ける、唯一の目的なのである。それでも大学の職業準備をこのように学問の後継者の育成に制限することが、少なくとも哲学部にとってある程度もっともらしかったのは、教授団が彼らによって養成されたギムナジウムの教師たちのサークルから補われた限りであった。

さらに引き続いて諸学問の統一という理念の真価が発揮され得たのは、上級学部⁽¹¹⁾が全く変化した学芸学部の学問的指導に従った時、そしてまた学芸学部をその本拠地にしていた哲学が、統合された自然科学及び精神科学の基礎科学に実際に昇格した時のみであった。そのことが、パンのための学問、各種専門学校という形での拡散、「その統一を認識の中に直接的にはなく、現象的な経済関係の中に」見い出すあの学部から単に派生したもの、これらに対する論争の意義であ

る。「大学の全構成員は、どの学部にも彼らが所属していようと、哲学部の中に根づいていなければならないので」、¹⁸ 逃れ得ぬ帰結だが、だが最初から反事実に (kontrafaktisch) もたらされたものとして、哲学部による支配への要求が生じた。

学問と一般教養の一致は、制度的に教育者と学習者との一致を前提としていた。「教師と生徒との関係は以前とは全く違ったものになる。教師は生徒のために在るのではなく、両者とも学問のために存在する。」¹⁹ 協働を目指す、原則的に平等なこの補完関係は、ゼミナール活動の討議形式において実現されなければならなかった。それは、実験自然科学を模範として取り入れた研究が、ヒエラルキーとして構成された研究所において形成した教職員構成とは相容れなかった。

最後に、学問と啓蒙の一致という理念は、それが、大学は小宇宙のようなその壁の内部で自由人と平等人の社会を先取りできるという期待を学問の自律性に積み込んだ限りにおいて、極端であった。哲学的学問は、高等学術機関がフンボルトにとって単に教育システム全体の頂点としてだけでなく、また「国民の道徳的文化の頂上」とも見なされたほど、類の普遍的能力を自らのうちに統合するように思われた。どのように啓蒙的・解放主義的使命が政治的節度と適合すべきかということは、確かに最初から不明確なままだったが、大学はその自由に対して、国家組織の代償というその政治的節度を弁済しなければならなかった。

ドイツの大学の設立理念を履行するための、この制度上の前提は、最初から与えられていなかったか、或いはまた 19 世紀が経つうちに、次第に満たされ得なくなった。雇用システムが分化発展すると、まず第一にますます大学における職業への学問的準備を必要とするようになった。工科大学、商科大学、教育大学、美術大学は、総合大学と並んでは長期間存続できなかった。次いで哲学部の母胎から生まれた経験科学は、手続き合理性の方法論的理想に従ったが、この理想が、経験科学の内容を哲学的全体解釈の中に百科全書的に組み入れるというあらゆる試みに挫折を運命づけた。²⁰ 経験諸科学のこの解放が、統一的・形而上学的世界解釈の崩壊を確定した。異なる価値判断を持った信仰勢力の多元主義の只中で、哲学はまた文化全般の解釈のためのその独占的地位をも失った。第三に、学問は産業社会の重要な生産力へと昇格した。例えばバーデンの中央政府は、既に 1850 年にギーセンにあるリービヒの研究所に目を向けて、「農業に対する化学の卓越した意味」²¹ を強調した。自然科学は、技術的に利用可能な知識を産出したために、その世界像の機能を失った。研究所というスタイルに応じて組織された研究の労働条件は、一般教養の機能よりも、経済と行政

の機能的命令に合うように設定されていた。最後に、ドイツにおける大学教育は、高級官僚のモデルに従って方向づけられた教養市民層を社会的に境界づけることに貢献した。²²しかし国民教育と大学教育との間の職能身分的な分化がこのように固定され、階級構造として確認されたが、それは大学の理念の普遍主義的意味内容と、その理念が社会全体の解放のために行った約束とを、持続的に否認した。²³

この対向的發展がますます強く意識されればされるほど、それだけいっそう大学の理念は事実に反して主張されなければならなかった——大学の理念は、高い社会的な威信を伴った職能階級のイデオロギーへと墮落した。精神科学と社会科学に対してフリッツ・K・リンガーは、ドイツ・マンダリン文化の衰退の年代を1890年から1933年までの時期に設定している。²⁴このマンダリンの、権力によって保護された内面性において、新人文主義的な教養の理想は、実践からかけ離れ、内に向かって自律的で、研究を集中した教育期間の、精神貴族的で非政治的な、政府に追従する自己了解へと歪められた。²⁵勿論、肯定的な側面も見なければならない。大学の理念は、両種の形態において——即ち理念としてもイデオロギーとしても——19世紀における、それどころか我々の世紀の30年代までも、ドイツにおける大学の学問の栄光と、国際的に比類のない成功に貢献した。つまり、それは国家によって組織された学問の自律性によって、学問的ディシプリンの細分化を研究過程それ自体の解放された内的ダイナミズムに委ねたのである。自然科学は、単に表面的にのみ受容された教養人文主義に保護されてすぐにその自律性を獲得し、その研究所の形で組織された研究活動によって、また初めはゼミナール形式で営まれた精神科学及び社会科学にとっても、実証主義的であるが、実り豊かな模範となった。²⁶それと同時に、ドイツ・マンダリンのイデオロギーによって、大学は団体としての強い自覚、文化国家からの助成や社会全体から承認された地位を獲得した。とりわけ、大学の理念に内在する過剰なユートピア的思考が、批判可能性をも保持したが、それは西洋合理主義の、普遍主義的であると同時に個人主義的な根本信条と一致しており、制度の革新のために折にふれて蘇生することができたのである。

IV

改革者たちも60年代の始めにはこのことを同じように信じていた。1945年以降は革新を導くにいたるような最初の誘因は十分ではなかった。物質的にも消尽

されていたが、それとともに協同意識も消失していた。大学の理念はマンダリン意識という伝統的様相のなかでナチス時代をもこえてなお生き残っていた。しかし、ナチ体制への抵抗が無力量を証明したことで、あるいはナチ体制との全き共犯関係を示したことによって、大学の理念は誰の目にもその実体が喪失したことを立証してしまったのである。それでも1945年以降フンボルトの理念を守る伝統主義者たちは守勢になっても十分に強力だったのであり、好意的な改革の試みを保持しつづけ、50年代末に設立された学術審議会のプラグマティストたちと折り合いをつけた。大学が不可避免的に量的に成長したことは、その時には、大学の構造が変わらないままでの拡張として生じた。トーマス・エルヴァインはそのことをふりかえて決定回避（Nicht-Entscheidung）をつぎのように定式化している。新構築の代わりに拡張、ならびに大学内部と第三の教育領域全体におけるヒエラルキーをもった構造の保持、——トップにある大学と共に。²⁷

このような状況のなかでヤスパースはふたたびフンボルトにもどっている。シュルスキーとSDSの学生たちは、その間に生じた大学の構造転換を冷静に診断して、彼らの改革提案をさらに充実させることによって、いくらか社会科学的に距離をおきながら、フンボルトの遺産の批判的継承を試みている。彼らは、職業実践の学問化（Verwissenschaftlichung）と同時的におこる大学のゲゼルシャフト化（Vergesellschaftung）⁽¹²⁾というキーワードのもとで、専門の細分化、研究の制度化、大学専門教育の学校化、学問の陶冶・啓蒙機能の喪失、教育構造の変化などを研究している。背景を形成しているのは、たしかに教育社会学の国際比較、教育経済学の需要分析、教育政治家の民法的要請である。これらすべてをシュルスキーは「物的法則性（Sachgesetzmäßigkeiten）」⁽¹³⁾というテーマでまとめている。なぜならこの過程はシステムの性格を示し、生活世界から脱却した構造を形成するからである。すなわち、この過程は大学の協同意識を空洞化し、フンボルト、シュライエルマッハー、シェリングがかって学問的反省の全体化する力で基礎づけようと意図した統合仮象を粉碎する。しかし興味ぶかいことに、シュルスキーは左翼の改革化たちと同様に、大学の物的法則性にたいして単に適応するということを決断するわけではない。すなわち、彼は、この間に事実上根をおろしたテクノクラティックな永続的な改革のタイプに賭けたりしない。この選択は、しかもこの当時発展したテクノクラティイ理論を予期させることすらなかった。その代わりに、シュルスキーは物的法則性を「具現化する（gestalten）」方向に向けるためにフンボルトの理念の基礎に素材をもとめる。「さてここで決定的であることは、これらの物的法則に従う発展の傾向は一面的事実であること、……それに対して

は、過去との再結合や具現的な対抗力の介入が必要であるが、それらは自明ではなく、創造的努力を払う場合でのみ実現されるということである。』²⁸ 細分化した学問システムは、まさに経済、技術、行政とともに成長するだけでなく、それらの機能を伝統的に束ねることを介して生活世界において係留され続けるべきなのである。しかもさらに、この機能を束ねることは学問それ自体の構造から説明されるべきである。

したがって、60年代初頭の理論的志向の強い改革運動は、何らかの統合力がそこになおあると信じられた学問の構想力から出発している。そしてさらに、大学は単に学問の外的で組織的な形態として捉えられている。もちろん、哲学の諸学問にたいする位置は、この間に哲学自身が細分化した専門科学の中核をもはや形成しないほど変化した。しかし、誰がこの空いた場所を占めるべきだったのか。諸学の統一の理念に固執するのは一般に必要であったのか。学問的プロセスのもつ全体化力は、たしかに総合としてはもはや考えることはできなかったし、絶対的なもの、あるいは世界全体にたいする形而上学的対象連関によって確保されることもできなかった。全体を何とか捉えようとする理論——それが直接にであろうと、専門科学による回り道を経てもであろうと——は、もはや議論にもとりあげられなかった。

ヤスパースは、比較的コンヴェンショナルな答えを示している。目的を問わず、方法にのみ規定される経験科学の合理性は純粹に手続き的なものであり、見渡しえないほど細分化した専門分野において内容の上で統合することをもはや根拠づけることはできない。しかし、まず周辺に押しのけられ、実存の解明と客観化しえない包摂するものの分析という課題に撤収させられた哲学にたいして、ヤスパースは、それでもなお遊離したディシプリンに対抗する特別な役割を留保しようとする。しかも、諸学のほうも哲学の指導を必要とすることになるという。なぜなら、哲学だけが無限の知識欲という動機を保証することができ、前提を反省したり、研究を導く理念を確かめることによって、学問的思考の習慣を確保することができるからである。このようにして、哲学は少なくとも大学の理念の守護者としての役割を、したがってまた改革のペースメーカーとなることを保持しているのである。

より理想主義的でないのは、哲学を科学の理論によっておき代えるシェルスキーの考察である。彼は専門(Fächerkanon)を自然科学、社会科学、精神科学の三部門に分けることから始める。各専門は自律的に展開するが、三専門グループはそれぞれ独自の知識形態をとまって、それぞれ異なった仕方で現代社会と機

能的に絡みあっている。各専門は哲学的反省によってもはや全体として包摂されることはできない。むしろ、哲学は諸科学へと転移され、各科学におけるそれぞれのディシプリンの自己反省として宿ることになる。こうして、虚構となったフンボルト的大学の統一にたいして、それと等価な代替物が生じる。「哲学は専門科学の内部から現れ、それを自己の対象として、批判的にのりこえることによって、哲学は再び、間接的にはあるが、科学文明の全体を自己の対象として獲得する。個別科学の限界と条件を探究することによって、哲学は、個別科学がその世界との関係を狭隘化することを防ぐのである」。²⁹ 私自身は、この時期には、方法的基礎の交錯、総合的な枠組み、客観的な応用連関を説明すべき実質的な学問批判を擁護するようになった。³⁰ この学問批判という自己反省の次元において、研究過程の生活世界との関連は、研究過程自身から明瞭になされうであろうし、しかもさらに、学問情報の応用過程にたいする関連だけでなく、とりわけ文化全体にたいする関連、すなわち一般的社会化現象、伝統の継承、政治的公共性の啓蒙にたいする関連も明らかにされることができる、というシェルスキーと同様の希望をもっていた。

なお、この改革運動とともにフンボルトの遺産の別の要素が再び息を吹き返した。私が示唆しているのは、教育と研究の自由という基本的権利の保証を超えて学問の自律性にあてがわれた範例的意味のことである。ヤスパースは、学問の自律性を、全体国家に抗して自由国家を守る国際的に分岐したコミュニケーション網の現実化と理解した。³¹ シェルスキーは、学問の自律性にたいして人格主義的で実存的な転換を与えた。すなわち、現代社会において具現化を必要とする物的法則から帰結するシステムの物象化のような行為への強制、義務的な孤独として実行されるその強制からの距離と、それに対抗しての人倫的な主権とを学問の自律性ということで意味したのである。³² SDS—大学覚え書きの著者たちにとって、そして一般には左翼の改革者たちにとって、われわれが当時大学の民主化として擁護したこと³³と一致したことは、国家的意思形成のモデルの大学への転用や、国家における国家の形成（Bildung）ではなくして、参加型の自治の形式での、全く範例的に考えられた政治的行為能力への期待である。

ここは、その時事実上実施された組織改革を全体として評価する場所ではない。私が確認しておきたいことは、大学の理念を批判的に継承することに基づくあの目的表象は実現されていないということだけである。また同様に、改革運動のこの部分が挫折したことを説明しようとするときに、回顧的に提示される二三の原因に立ち入ることもできない。シェルスキーは、1970年に自著の補遺のなかで、

改革の挫折を次のように説明している。すなわち、学問システムは複合性の増大という圧力のもとで高度に細分化したので、そのさまざまな機能において「もはや共通の理想像からは束ねることはできない」、³⁴と。「理想像」という欺瞞的なその表現は、研究自身の分化のダイナミズムと歩調を合わせるためには、多分実際にはあまりにもナイーブすぎた前提を指摘している。明らかに非現実的であるのは、ディシプリンとして組織された研究組織にたいして、研究自身の論理からは生じないような反省形態が根をはるということになるという仮定である。現代の経験科学史が教えることは、通常科学（*normal science*）は、ルーティーン作業によって、また問題設定にたいして研究の日常を防御する客観主義によって特徴づけられるということである。反省への誘因は危機によって解き放たれるが、しかしその時にも、退化したパラタイムの新しいパラタイムによる駆逐は、むしろ自然発生的におこるにすぎない。それにたいして、根本的反省と学問批判が永続的になされるところでは、反省への動因は——哲学それ自体のように——諸専門とならん専門として確立されるのである。それに劣らず非現実的であるのは、次のような期待である。すなわち、大学の合議による自治は、もっぱら大学に関与するグループが政治的生活に機能的に分化した（*gegliedert*）参加をすることによってのみ果たされるし、政治的行為能力が獲得されるのは、改革が教授たちの意思に抗して管理方式にまで及ばざるをえない時にまさにはじめてなのだ、という期待である。しかし大学の内的関係がこのような前提のもとでもはや救いがたいときには、大学がかつて自発的に所有することになったあの愛すべき理念なしでも全くうまくやっていると認めるわけにはいかないであろう。

V

社会科学的システム論は、その基礎概念を選択することによって事前の判断（*Vorentscheidung*）を下すことになる。即ち、それが仮定するのは、全ての社会的行為領域は、貨幣や行政権力といった価値中立的な制御メカニズムによって規範的な方向づけのレベルの下に統括される、ということである。システム論にとっては理念と制度の統合的な力は、システム的に相互に調和していないと同時にまた規範を必要としない、行為の流れとコミュニケーションの流れという実体の、多かれ少なかれ機能的な上部構造に先験的に属している。この純粹に方法上の事前の判断は性急であると私は考える。規範と価値志向は、常に生活世界のコンテクストの中に埋め込まれている。この生活世界がどんなに分化していようと

も、それは背景において全体性で在り続け、それ故にあらゆる分化のプロセスを、その全体化の吸引力の中に再び取り組むのである。生活世界の機能は——即ち、文化的再生産、社会化及び社会統合を指すが——、特殊な行為領域の中で細分化されるかもしれないが、結局は呪縛され生活世界の地平の中へ定着され続け、また相互に交差し続けるのである。システム論者は、まさにこの状況を自らにとって有利な結果へと転じる。即ち、理念と制度の持つ統合的な力を——例えば大学の理念がそうであるが——未だに真剣にとる理論的試みは、社会的複合性の背後にとり残されるというのである。何故ならば、現代社会においては自律的で全く相互に交差していないサブシステムが形成され、まさに一つの機能、即ちある種の業績だけに専門化されているからであるとする。

この主張は、貨幣を介して制御される経済やあるいは権力関係を介して規制される国家行政を注視することから、その明証性を引き出している。その際問題なのは、この観察結果をあらゆる行為システムに普遍化することである——そこから初めてシステム論はその要点を手に入れる。システム論が示唆するのは、どの行為領域も、それが社会的近代化の現状にただ遅れまいとする時には、機能的に専門化され、制御メディアを通して細分化され、相互に分断された部分システムというこの形態を仮定しなければならない、ということである。システム論は、このことがあらゆる行為領域に適用され得るかどうかが、初めに全く尋ねることをしない。例えば、その中心的な分野が今日まで未だに機能収束的な(*funktionsbündelnd*) 制度システム——即ち、資本主義的企業や或いは国際的な官庁と同じようには生活世界の地平から決して脱却していない学術的な大学——に帰属している学問的営為(*Wissenschaftsbetrieb*)のような文化的行為システムに当てはまり得るかどうかが、ということである。初めになお示されなければならないのは、大学から疎開した大型研究と基礎研究が、大学の中で組織された学問の生成過程から全く切り離すことができるであろうか——これらの研究が自立し得るであろうか、それとも寄生的な状態にとどまるか——ということである。大学の形式から、従って研究からも遮断された学問的な専門教育が損害を受けるかもしれないということは、少なくとも一つのもっともらしい推測である。システム論的な過度の一般化に対して、まず第一に、シェルスキーが次のように的確に述べている経験が不利な材料を提供する。『現代の大学の制度史的発展における比類無き特質は、この場合、機能分化が同じ制度の内部で行なわれ、機能喪失は課題を他の組織へ手渡すことによって殆ど起こらない、という点にある。逆に、むしろ前世紀の間に大学が発展する際にその機能が充実したこと、少なくとも

も大学が意味を獲得し、その機能領域が拡大したということを問題にすることができる。』³⁵

そのように事実またタルコット・パーソンズは、大学社会学にとって今日まで標準的な、アメリカの大学に関する著書³⁶の中で、大学のシステムが四つの機能を同時に果たすということから、疑いも持たずに出発している。即ち、(a) 研究と学問の後継者の育成という中心的機能は、一方で (b) 大学での職業準備（そして技術的に利用可能な知識の生産）と、他方では (c) 一般教育の課題、そして (d) 文化的自己了解及び知的啓蒙と結びついている。パーソンズは、制度上より分化の進んだアメリカにおける大学組織を引き合いに出し、そして取り上げたうちの最初の三つの機能に、それぞれ異なる制度——即ち、大学院、職業学校、カレッジ——を割り当てる。しかし、これらの制度のどれもその内部でもう一度非常に分化しているので、それはその都度程度は異なるが、あらゆる機能領域へ向かって分岐する。第四の機能だけが固有の機関を持たない。それは、教授という知識人の役割を通して果たされる。パーソンズがこの第四の機能の中に次の両方の機能、即ち外部へ向けられ、公共性にあてられた啓蒙の業績だけでなく、学問の持つ固有の役割に対する反省と、学問、道徳、芸術という文化的価値領域相互の関係に対する反省も含めるということを考慮するならば、この機能の一覧表は、まさに、プロイセンの改革者たちがかって「一致」として仮定したものを変形させて再現するということが認識される。つまり、その一致とは研究と教育の一致、学問と一般教養との一致、学問と啓蒙との一致、そして諸科学の統一である。

この最後の理念は、確かにその意味を大きく変えた。何故ならば、学問的ディシプリンの持つ、公然と細分化した多様性は、もはやそれ自体、あのあらゆる機能を束ねることができる媒体を意味しない。しかしながら、相変わらず大学の学習過程は、経済や行政と交流しているだけでなく、生活世界の再生産機能の学習と内的に関連している。大学での職業準備を越えて、大学の学習過程は、学問的な思考方法、即ち事実と規範に対する仮説的立場を身につけることによって普遍的な社会化の過程に貢献する。専門家の知識を越えて、大学の学習過程は、専門的な情報を受けて同時代を診断する解釈と事実とに即した政治的な態度決定によって、知的啓蒙に寄与する。方法と基礎を反省することを越えて、大学の学習過程は、精神科学によって、また伝統を解釈学的にさらに形成し続け、学問や道徳、芸術や文学の理論によって、文化全体における学問の自己了解に寄与する。これらの様々な機能を同時に果たすことを通して、細分化した専門ディシプリンを生活世界に確かなにお根づかせるのは、学問的学習過程という大学形式の組織で

ある。

専門分野の細分化には、勿論、それに対応した大学内部での高度の分化が必要である。このことは、未だになお続いている過程であり——例えば卒業生学院(Graduiertenkolleg)の設立という、學術審議会から推奨された方法において見られる。様々な機能が、様々な人間のグループによって、様々な制度上の場所において、様々に加重されてみとめられる。従って、協同意識は希薄化して、なるほど人は他者とは違ったことをするが、しかし纏めてみれば、全員が色々な方法で学問を営むことによって、一つの機能だけでなく、また一纏まりの機能をも果たすという、相互主観的に共有された知識になる。これらの束ねられた機能は、分業によって営まれた学問過程を経て相互に交差され続ける。諸機能が束ねられた状態にあるということは、しかし今日では、シェルスキーが言ったように、ドイツにおける大学が持つ規範的な理想像の結合力にはもう殆ど還元され得ない。このことは一体望ましいことだろうか。

六百周年の設立記念祭を、大学の理念とそこに残っているものを思い出させるためにも役立てることは、確かに有益である。それがどんなに希薄化しようとも、大学の構成員の協同意識は、そのように想起させることによってそれどころか強固になるかもしれない——しかしこのことが可能となるのは、想起の仕事自体が学問的分析の形式をとり、テクノクラティックな大学の日常を日曜日気分で補うつもりで儀式だけに留まらない場合にのみである。もし大学の団体としての自己理解が一つの規範的な理想像のようなものに定着しているとしたら、その自己意識にとって良くはないだろう、何故ならば、理念は移り変わるものだからである。古き大学の理念のパラドックスは、まさに、その基礎が何か不変なものの中に——まさしく、長い間に細分化した学問過程それ自体の中に——置かれなければならない、ということである。ところが、ディシプリンの多様性が全てを包括する哲学的基礎科学の全体化する力であれ、或いはまた、専門それ自体に由来する、実質的学問批判の反省形式のそれですら、その全体化する力のためにもはや余地を残さない故に、学問がそのような理念の拠り所としてもう役に立たないとしたら、その時には団体の統合的な自己理解は何処にその基礎があり得るのだろうか。

その答は、既にシュライエルマッハーにおいて見い出される。「認識へと向けられたあらゆる努力の第一の法則は、伝達(Mitteilung)である。そして何か或ることを自らに対してすら独り言でも言おうとしたら、言葉なしには言い表わせないということの中に、自然自体がこの法則を全くはっきりと語ったのである。

それ故に、純粹に認識への欲求から考えても……また、その欲求を目的通りにやり遂げるのに必要な総ての結びつきや、各分野の仕事における、様々な種類の伝達と共同体は、自ずから具現化しなければならない。」私は、シュライエルマッハーの『ドイツ的意味での大学についての随想』(„Gelegentliche Gedanken über Universitäten im deutschen Sinn“)³⁷の中のこの一つの見解に感傷性に浸ることなく依拠する。⁽¹⁴⁾何故ならば、大学の学習過程が結局のところその様々な機能において統括されるのは、学問的論議 (Argumentation) のコミュニケーション形式によってである、と私は真剣にそう思っているからである。シュライエルマッハーは、それを「誰か或る学者が、閉じこもって一人で孤独な仕事と試みの中で生きているかのような空虚な仮象」と見做している。たとえその人が図書館の中や勉強机で、また実験室の中で一人で仕事をしているように見えとしても、彼の学習過程は、研究者の公共的なコミュニケーション共同体の中に避けがたく埋め込まれている。協働的な真理探求の試みは公共的な論議のこのような構造を指示するので、真理は——或いはたとえそれが全く単に研究者の共同体 (*community of investigators*) の中で獲得された評判にすぎないとしても——決して自己規制的なサブシステムの単なる制御メディアにはなれない。学問的ディシプリンは、専門内在的な公共性 (*fachinterne Öffentlichkeiten*) の中で構成され、そしてこの構造においてのみ、その生命力を維持することができる。専門内在的な公共性は激しい勢いで合流し、再び大学の公共的な組織運営 (*Veranstaltungen*) へと分枝するのである。正規の公的な教授 (*der Ordentliche öffentliche Professor*) という時代があった称号は、講義や、ゼミナール、付属研究所の作業グループでの学術的協働の持つ公共的性格を思い起させる。それは、まさにゼミナールの理想形式にだけでなく、また学問的作業の標準形式にも当てはまるが、そのことはフンボルトが、大学教授の、彼らの学生たちとのコミュニケーション的な交流について述べたことである。即ち、教師は、「彼ら (学生たちと比較的若い同僚たち) が自ら進んで彼の周りに集まらなかったら、熟練しているがまさにそれ故に偏ったものになりがちで、そして既に生き生きしているとは言えない力と、より弱いかなお不偏不党であらゆる方向に向かって進んで努力する力とを結合することによって、自分の目的にさらに近づくために、彼らを求めて出かけるだろう」³⁸。

私があなた方に断言できるのは、この文章が、哲学研究室の場合に劣らず、マックス・プランク研究所のより堅固に組織された経営においても真実であることが確証される、ということである。大学のなお向こう側では、学問的学習過程がそ

の大学の根源形式のうちのいくらかを保持している。その学問的学習過程は全て、思いがけない論証 (Argument) という約束手形 (promissory note) を所有している討議的論争の刺激力と生産力に依存して生きている。扉は開かれており、今にも新たな顔が現れ、新たな思考が突然生じてくる。

さて私は、研究者のコミュニケーション共同体を範例的なものへと様式化するという過ちを繰り返したくはない。その論議形式の、平等を目指した普遍主義的な意味内容において現れているのは、何よりもまず学問的営為の規範だけであって、社会全体の規範ではない。しかし学問活動の規範は、明確なやり方であるコミュニケーション的合理性に関与しており、その形式において、現代の、即ち不確定で理想像無き社会は自分自身について自己了解しなければならないのである。

原註

- 1 K. Jaspers, K. Rossmann, *Die Idee der Universität* (『大学の理念』), Heidelberg 1961.
- 2 Jaspers, Rossmann (註1を見よ), S. 36.
- 3 K. Reumann, *Verdunkelte Wahrheit* (『隠蔽された真実』), 1986年3月24日付の *Frankfurter Allgemeine Zeitung* に所収。
- 4 H. Schelsky, *Einsamkeit und Freiheit*, Hamburg 1963. S. 274. 田中昭徳・阿部謹也・中川勇治訳『大学の孤独と自由』1970年、未来社、262頁。
- 5 W. Nitsch, U. Gerhardt, C. Offe, U. K. Preuss, *Hochschule in der Demokratie* (『民主主義における大学』), Neuwied 1965, S. VI.
- 6 Jaspers, Rossmann (註1を見よ), S. 7.
- 7 考慮に入れられていないのは、その他の94の単科大学と26の美術大学である。H. Köhler, J. Naumann, *Trends der Hochschulentwicklung 1970 bis 2000* (『1970年から2000年までの大学発展の傾向』), in: *Recht der Jugend und des Bildungswesens* (『青少年の権利と教育制度』), 32. Jg. 1984, H. 6, S. 419 ff. 概説は Max-Planck-Institut für Bildungsforschung, *Das Bildungswesen in der Bundesrepublik* (『ドイツ連邦共和国における教育制度』), Hamburg 1984, S. 228 ff. に所収。
- 8 Max-Planck-Institut für Bildungsforschung, *Bildungsbericht II* (『教育報告 II』).
- 9 Wissenschaftsrat, *Empfehlungen und Stellungnahmen* (『勧告と見解』), 1984; ders., *Empfehlungen zum Wettbewerb im deutschen Hochschulsystem* (『ドイツの大学制度における競争に対する勧告』), 1985; ders., *Empfehlungen zur Struktur des Studiums* (『大学での勉学の構造に対する勧告』), 1985; *Empfehlungen zur klinischen Forschung* (『臨床研究に対する勧告』), 1985.
- 10 K. Hüfner, J. Naumann, H. Köhler, G. Pfeffer, *Hochkonjunktur und Flaute: Bildungspolitik in der BRD* (『好況と不況——ドイツ連邦共和国における教育制策』),

- Stuttgart 1986, S. 200 ff. K. Hüfner, J. Naumann, *Konjunktoren der Bildungspolitik in der BRD* (『ドイツ連邦共和国における教育政策の景気』), Stuttgart 1977 も参照せよ。
- 11 教育改革の提言の経歴が持つ国民的な非同時性も、このことを証明している。例えば昨年、コレージュ・ド・フランスの教授ら 50 名が、フランスの大統領に教育改革勧告をそのように提出したが、それは主旨と目的設定において、ドイツ連邦共和国の 60 年代後半における改革の雰囲気を読み起させるものである。ピエール・ブルデューの示唆を受けた勧告は、*Neue Sammlung* (『ノイエ・ザムルング』), Jg. 25, 1985, H. 3 に所収されている。
 - 12 W. von Humboldt, *Über die innere und äußere Organisation der Höheren wissenschaftlichen Anstalten* (1810), in: E. Anrich (Hg.), *Die Idee der Deutschen Universität* (『ドイツにおける大学の理念』), Darmstadt 1959, S. 379. 梅根 悟訳『ベルリン高等学問施設の内的ならびに外的組織の理念』210-211 頁、梅根 悟・勝田守一監修 世界教育学選集 53 フィヒテ他著 梅根 悟訳『大学の理念と構想』所収、1970 年、明治図書。
 - 13 「知識の領域で常に限定された熟練さを普遍的な意味に結び付けることなしには、個人にとってと同様に国家にとっても、少なくとも立派で崇高な生活というものとは存在しない。国家は、個人と同じように、これらの全知識に対して、それが学問において基礎づけられていなければならない、そしてただ学問を通してのみ正しく発展し完成し得るという、まさにその前提条件を、当然で不可欠なものとするのである。」F. Schleiermacher, *Gelegentliche Gedanken über Universitäten im deutschen Sinn* (1808), in: E. Anrich (Hg.) (註 12 を見よ), S. 226, 梅根 悟・梅根栄一訳『ドイツの意味での大学についての随想』15 頁、梅根 悟・勝田守一監修 世界教育学選集 17 シュライエルマッヘル著『国家権力と教育』所収、1961 年、明治図書。
 - 14 F. W. J. Schelling, *Vorlesungen über die Methode des akademischen Studiums* (『大学における学問研究方法についての講義』) (1802), in: Anrich (Hg.), S. 20.
 - 15 Schelling, in: Anrich (Hg.) (註 12 を見よ), S. 21.
 - 16 E. Martens, H. Schnädelbach, *Philosophie-Grundkurs* (『哲学-基礎講座』), Hamburg 1985, S. 22 ff.
 - 17 J. G. Fichte, *Deduzierter Plan einer in Berlin zu errichtenden höheren Lehranstalt*, in: Anrich (Hg.) (註 12 を見よ), S. 217, 梅根 悟訳『ベルリンに設立予定の高等教授施設についての演繹のプラン』、『前掲書』所収、123 頁。
 - 18 Schleiermacher, in: Anrich (Hg.) (註 12 を見よ), S. 259 f., 邦訳 57 頁。
 - 19 Humboldt, in: Anrich (Hg.) (註 12 を見よ), S. 378, 邦訳 211 頁。
 - 20 この新しい状況に対するドイツ哲学の反応については、H. Schnädelbach, *Philosophie in Deutschland 1931-1933* (『1931 年から 1933 年にかけてのドイツにおける哲学』), Frankfurt/Main 1983, S. 118 ff. を参照せよ。

- 21 J. Klüwer, *Universität und Wissenschaftssystem* (『大学と学問システム』), Frankfurt/Main 1983, S. 1985.
- 22 L. von Friedeburg, *Elite-elitär?* (『エリート——エリートの?』), G. Becker u. a. (Hg.), *Ordnung und Unordnung* (『秩序と無秩序』), Weinheim 1986, S. 23 ff. に収録。
- 23 Th. Ellwein, *Die deutsche Universität* (『ドイツの大学』), Königstein 1985, S. 124ff.
- 24 F. K. Ringer, *The Decline of the German Mandarins* (『ドイツ・マンダリンの衰退』), Cambridge/Mass. 1969.
- 25 Ringer の著作に関する私の書評 *Die deutschen Mandarine* (『ドイツのマンダリン』) を参照せよ。in: J. Habermas, *Philosophisch-Politische Profile* (『哲学的・政治的プロフィール』), Frankfurt/Main 1981, S. 458ff. 小牧 治・村上隆夫訳『哲学的・政治的プロフィール(下)』、1987年、未来社、293頁以下。
- 26 このテーゼについては、J. Klüwer を参照せよ(註 21 を見よ)。
- 27 Ellwein (註 23 を見よ), S. 238.
- 28 Schelsky (註 4 を見よ), S. 275, 邦訳 262 頁。
- 29 Schelsky (註 4 を見よ), S. 290, 邦訳 276 頁。
- 30 J. Habermas, *Vom sozialen Wandel akademischer Bildung* (『大学教育の社会的変遷について』), ders., *Universität in der Demokratie—Demokratisierung der Universität* (『民主主義における大学—大学の民主主義』), 共に ders., *Kleine Politische Schriften I—IV* (『政治小論集I—IV』), Frankfurt/Main 1981, S. 101ff. und S. 134ff. に所収。
- 31 Jaspers, Rossmann (註 1 を見よ), S. 33ff.
- 32 Schelsky, (註 4 を見よ), S. 299:「その危険とは、人間が外的な、外界を変革する行為にのみ自己を投機し、他の人間と自己自身を含めた一切のものを、構成的な行為の対象レベルにおいて固定し取り扱う、ということである。人間から自己自身や他者の内的な自己同一性を奪いかねない、人間のこの新しい自己疎外、即ち人間のこの新たな形而上学的誘惑は、創造者が自分の創造物の中に、設計者が自分の設計の中に消失してしまうという危険なのである。確かに人間は、自ら産み出した客観性の中に、作動的に構成された存在の中に自己を悉く転移させることを畏れて後退りはするが、それにもかかわらず、科学的・技術的自己客体化というこの過程の進展に絶え間なく従事しているのである。」邦訳 285 頁。
- 33 註 30 を参照せよ。
- 34 Schelsky, *Einsamkeit und Freiheit*, 2. Aufl., Hamburg 1970, S. 243, 邦訳 200 頁。
- 35 Schelsky (註 4 を見よ), S. 267, 邦訳 256 頁。
- 36 T. Parsons, G. M. Platt, *The American University* (『アメリカの大学』), Cambridge/Mass. 1973, 第 2 章の補遺, S. 90ff. を参照せよ。

37 In: Anrich (Hg.) (註 12 を見よ), S. 224, 邦訳 12 頁。

38 Humboldt, in: Anrich (Hg.) (註 12 を見よ), S. 378, 邦訳 211 頁。

Aus „Eine Art Schadenabwicklung. Kleine Politische Schriften VI“,
© Suhrkamp Verlag, Frankfurt am Main, 1987.

訳註

- (1) マンダリン (Mandarin) は、元々は中国人の知識人官吏についてのウェーバーの分析に基づいており、高級官僚 (小牧・村上訳)、官人 (世良訳)、官神 (松沢)、大官 (森岡訳) 等と訳されている。リンガーによるドイツ・マンダリンの再構成は、「アカデミックな教養ある市民階級の、特殊にドイツ的な特徴に関係している」(Habermas, J., *Philosophisch-Politische Profile*, Frankfurt/Main 1981, S. 460, 邦訳 296 頁。なお、原註 25 を見よ)。
- (2) グループ制大学 (Gruppenuniversität) は、集団代表制大学または専攻制グループ大学とも訳される。正教授中心の教授会・学部自治を行なう従来の正教授大学 (Ordinarienuniversität) に対する批判から、その解決策として新たに登場してきたのがこのグループ制大学であり、その運営は教授以外の大学構成員も参加する合議体制に基づく。「旧来の学部制度からグループ代表組織としての専門領域委員会 (Fachbereichsrat) を持った専門領域 (Fachbereich) への解消」(Boehm, L., Müller, R. A., *Universitäten und Hochschulen*, Düsseldorf, 1983, S. 29) を伴った西ドイツの大学のこの大きな構造転換は、必ずしも民主的な大学自治を可能にしたとは言えず、今日ではこのグループ制大学が、政治的・一般的な利害を代表する、大学内の対立する分立組織の支配する分立制大学 (Fraktionsuniversität) であるとして批判される傾向もある。天野正治編集・解説『世界の大学制度』、1984 年、至文堂、86～87 頁ならびにリンス, U, 田島照久訳「大学と国家」、『現代のドイツ 大学と研究』所収、1981 年、三修社、77～78 頁、95～96 頁を参照せよ。
- (3) 第三の領域 (tertiärer Sektor) は、天野正治、『前掲書』95 頁、によると、第三セクター (高等教育領域) を指すものと推定される。
- (4) 学術的大学 (wissenschaftliche Hochschule) とは、12～13 年間の初等・中等教育修了の資格を有する者が入学できる高等教育機関の二つの区分の一つで、卒業資格として博士号 (Doktor) が授与される。これに含まれるのは、伝統的な総合大学 (Universität)、工業大学 (Technische Hochschule)、教育大学 (Pädagogische Hochschule)、神学大学 (Theologische Hochschule)、芸術大学 (Kunsthochschule) の五つのカテゴリーである。これに対して、卒業資格として一般大学入試資格としてのグラデュイールング (Graduierung) のみが取得される高等教育機関が専門 (単科) 大学 (Fachhochschule) である。さらに、これら二つの類型の混合形態として、総合制大学 (Gesamthochschule) が 1970 年以降設立され、そこでは学術

的大学に準じた学習過程での博士号（学位）取得も可能である。詳しくは、天野正治、『前掲書』、83～85 頁ならびに大西健夫「大学の伝統」、大西健夫編『前掲書』、21～24 頁を参照せよ。

- (5) 学術審議会（Wissenschaftsrat）は、連邦政府と州との間の合意により 1957 年に設置された学問と研究の総合計画遂行のために連邦政府及び州の諸計画案の相互の調整を図ることなどをその役割としている。委員会は 39 名の委員よりなり、学術審議会 Wissenschaftskommission（16 人の学者と一般から 6 人）と管理委員会 Verwaltungskommission（州の代表 11 人と連邦政府の代表 6 人）との二委員会から構成され、決議は、三分の二以上の多数が必要とされる。詳しくはリンス、U、田島照久訳『大学と国家』、大西健夫編『前掲書』、69～71 頁を参照されたい。
- (6) Öffentlichkeit は、「公共性」とか「公論」とかの訳語が一般に当てはめられているが、本稿では「公共性」に統一している。これは、コミュニケーション的行為による合意形成が行なわれる場とでもいえるであろう。生活世界をハーバーマスは私的領域と公共性の領域とに区分している。「公共性の構造転換」、即ち現代社会における公共性の脱政治化は、彼の「植民地化」のテーゼと直接関わる主要テーマである。TkH. 特に 307f., II 470 頁以下を参照。なお、訳語に関しては、三島憲一「精神と政治の道具的ならざる関係をめぐって」、『現代思想』vol. 14-11, 1986 年 10 月号、青土社所収、267 頁、並びに 1 の訳註 4 での轡田氏の訳註（三）28 頁を見よ。
- (7) 社会化（Sozialisation）、（文化的）継承（Überlieferung）、社会統合的意思形成（sozialintegrative Willensbildung）という生活世界の再生産過程は、それぞれパーソナリティ、文化、社会という生活世界の構成成分に対して、個人の社会化、文化の了解、行為の調整という寄与をする。詳しくは、TkH. II S. 212ff., 下 48 頁以下を見よ。
- (8) 文化国家（Kulturstaat）とは、次のような文化政策の格率に国が従うことを意味する。「教養と学問の諸制度に関して種々の方策を講ずる場合、国家はそれらの制度をそれ自身のために求め、支援すべきであって、国家自身の権力的、社会的利害と結びついた他の目的を追求すべきではない、という格率なのである。国家は教育施策に関して、いわば次のような定言的命令を課されるのである。すなわち、汝は教育の制度を常に目的として取り扱い、決して単なる手段に貶めぬように行為せよ。」（シュルスキー、『前掲書』、140 頁）従って、「この理念は、みずからが市民社会の利益代弁者であるとするような国家の大学政策には抵抗するが、支配権力としての国家には抵抗しない。」（138 頁）のである。
- (9) 「学校というものは既存既成の知識を教え学ぶところであるのに反して、高等教育施設は、学問を未だ全く見つけだされていないもの、そして見出され得ないものとしてみなすところにその特色をもつものである。」フンボルト、『前掲書』、210～211 頁。以下原註 19 に続く。
- (10) 「この施設は人びとができるだけ、せいっぱい学問の純粋な理念と対決することによってその目的を達成することができるものであるから、そこでは孤独と自由が支配的な原理となる。しかしながら人間の知的活動は共同活動によって実り多いものになっ

てゆくものである。」フンボルト、『前掲書』、210頁。

- (11) 上級学部 (die oberen Fakultäten) とは、神学部、法学部、医学部の、中世以来の伝統的な三学部を指す。
- (12) ここではゲゼルシャフト化 (Vergesellschaftung) は、生活世界とシステムとの対抗的な二原理の交錯というハーバーマスのテーマよりも、テンニース以来のゲマインシャフトに対する利益社会化という伝統的な意味で使用されていると考えられる。シェルスキー『前掲書』、200頁以下参照。
- (13) 物的法則性 (Sachgesetzmäßigkeit) は、シェルスキーの邦訳では、客観的法則性とされているが、本稿では Habermas, J., *Technik und Wissenschaft als Ideologie*, 1968, 長谷川 宏訳『イデオロギーとしての科学と技術』、1970年 紀伊国屋書店、からその訳語を採った。
- (14) 「その科学というものは決して個人だけでやれるもの、一人で完成したり、独占したりできるものではなく、共同のしごとであって、各人はそれぞれ自己の分をそこに寄与し、各人は人々と同じ意図をわけ合うべきものであり、また各人の所有する科学はそうした全体のうちほんの一部をはなはだ不完全に所有するにすぎないものであること、このこともまた一般よく知られるようになる必要がある。実際学問の世界ではすべてのことがお互いに関連しあっていて、一つのことをそれだけ述べたのでは、さっぱり分からないものである。それは厳密に言うなら、それぞれの個々は他のすべてのものの全体との関連においてのみ、見透されるものであり、したがってまた各部分を仕上げることは、他のすべての仕上がり依存しているからである。」シュライエルマッハー、『前掲書』、11～12頁。

3. むすびに——教養の理念的、制度的革新にむけて

ハーバーマスは、大学における学問的学習過程が、大学の理念が掲げてきたさまざまな機能を束ね、生活世界の再生産を維持・拡大できる道は、「学問的論議のコミュニケーション的形式」「専門内蔵的な公共性」によってである、というのであろう。この主張は、彼が私的領域での実存的決断主義だと批判したウェーバーの地平を超克しえたであろうか。「意味喪失をウェーバーは、社会の秩序の中では最早達成され得ない統一性を、それぞれの個人の人生という私的領域の中で、絶望の勇氣によって、つまり希望なき者の不条理なる希望によって創出せよという、個々人に対する実存的要求として釈明するのである」。⁽¹⁾ ウェーバーは価値多元的現実のなかだからこそ知の明晰性によって価値の首尾一貫性をもとめることの意義をいうのだが、ハーバーマスはそれに何を対置するのだろうか。

われわれ大学に所属する構成員自身がどのように大学を自己規定するのか、そ

の自己認識の仕方そのものが、大学の現実を形作っていくことになるし、それがかかえた問題を自己克服していく力にもなりうる。ハーバーマスは、この事態を日常的コミュニケーション的行為と反省的論議との往還関係において、歪められたコミュニケーションが相互に検証・克服されていく過程として捉えているといえよう。現実認識も規範も関与しうるすべての人々にとって相互承認に値するものでなければならないのであって、大学改革そのものが反省を媒介にしたコミュニケーションのうちに進行していくものでなければならない。

生活世界の植民地化のなかでコミュニケーション的下部構造におこる文化的貧困化が、生活世界を分散化・断片化している一方、この意味喪失という「呪われた運命」⁽²⁾のもとにおいては、逆に今や、合理的知として「科学こそが思考による世界観察のただ一つの可能な形態だ、という主張を携えて立ち現れてくる」⁽³⁾。この科学の絶対視、「理性のカリスマ的神聖化」⁽⁴⁾の危険性が日常的になり、学問の自己増殖が専門の細分化として進展する大学において、生活世界へのたちかえりという戦略も大きな困難の前にたたされることは間違いないであろう。シェルスキーはソレルの「偉大を目指す動きはつねに強いられたものであり、衰亡への動きはつねに自然なものである」という言葉を引いて述べている。「機能的に『自然な』分化や専門化の傾向を追うだけに留まるならば、それが大学の解体や分解に墮すことは誰の目にも明らかである」⁽⁵⁾。

以上、ハーバーマスにおけるコミュニケーション的行為論の意図をよみとるなかで『大学の理念』の位置づけを試みてきたが、ハーバーマスの大学論それ自体すら固有の対象として考察できなかった。本稿は、二人にとって大学論の学習過程のはじまりであり、今後に期したい。

註

- (1) *TkH*, I 337、上 339 頁。なお、姜『前掲書』、201 頁。
- (2) Weber, M., *Zwischenbetrachtung*, in: *Gesammelte Aufsätze zur Religionssoziologie I*, 1920, 1963⁸, S. 570, 大塚久雄・生松敬三訳『宗教社会学論選』1972 年、みすず書房、159 頁。
- (3) *Ebd.*, S. 569, 156 頁。
- (4) Ders., *Soziologie der Herrschaft*, in: *Wirtschaft und Gesellschaft*, 1921, 1976⁸, S. 734, 世良晃志郎訳『支配の社会学』II、1961 年、創文社、655 頁。
- (5) シェルスキー『前掲書』262 頁。

(昭和 63 年 4 月 30 日受理)